東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

Changes in the Images of Hospitals, Patients, Nurses and Nursing between the First Clinical Practice and the Graduation

著者	WATANABE Hiromi, SUGIYAMA Toshiko, TERASHIMA Mikiko, HAGIWARA Harumi, ISHIDA Machiko, YAMAZAKI Toshiko, KASHIWAGURA Eiko, ITAGAKI Keiko, KOBAYASHI Atsuko, Shoji Yumi, HORIKAWA Etsuo, ITO Hisako
journal or publication title	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
volume	5
number	2
page range	141-148
year	1996-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/33624

東北大医短部紀要　5(2)：141～148，1996

看護学生の卒業時における「病院」，「患者」，「看護婦」，「看護」のイメージの変化
——1年次と比較して——

渡邊裕美，杉山敏子，寺島美紀子，萩原晴美
石田眞知子，山崎登志子，柏倉栄子，板垣恵子
小林淳子，庄子由美*，堀川悦夫**，伊藤尚子

東北大学医療技術短期大学部看護学科
*東北大学医学部附属病院
**東北大学医療技術短期大学部一般教育

Changes in the Images of Hospitals, Patients, Nurses and Nursing between the First Clinical Practice and the Graduation

Hiromi WATANABE, Toshiko SUGIYAMA, Mikiko TERASHIMA, Harumi HAGIWARA
Machiko ISHIDA, Toshiko YAMAZAKI, Eiko KASHIWAGURA, Keiko ITAGAKI
Atsuko KOBAYASHI, Yumi SHOJI, Etsuo HORIKAWA and Hisako ITO

Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University

Key words：卒業時のイメージ，臨床実習

In order to examine the changes in images for hospitals, patients, nurses, and nursing, the questionnaire investigations were carried out after the first clinical practice in the first grade and just before the graduation. They were addressed to the 72 students who entered our department in 1992. The main results are：

1. The changes in images for hospitals are smaller than those for the others. It may be because the students are more concerned about patients, who are the direct objects of nursing care, and nurses, who practice it.

2. The mean scores of "tender" and "patient" have risen significantly. The students have come to pay attention not only to the appearance but also to the patients' needs and the necessity of nursing care, so the mean score of "unclean" has stayed low.

3. The item of "angelic" which stands for longing for nurses has fell in the estimation perhaps due to the experiences through the clinical practices. And the students felt the sense of fulfillment rather than difficulty, which led to the reduction of the sense of "hard".

4. 5 mean scores out of 10 items for nursing have changed significantly. These images have come to reflect the reality because of the study for 3 years and the clinical practices.

はじめに

我々はこれまでに東北大学医療技術短期大学部看護学科の学生及び高校生を対象として看護のイメージに関する調査[1)~5)]を行ってきた。その結果，東北大学医療技術短期大学部看護学科に入学したものは入学時点ですでに看護婦に対して良好なイメージを抱いていることが明らかになった。「看護婦」，「看護」のイメージは，1年次の基礎看護Ⅰ実習後と2年次終了時で大きな変化はないことがわかった。

今回は平成5年度入学生の卒業時の看護のイメージに関する調査を行い，1年次のイメージと比較検討した。その結果，いくつかの知見が得られたので報告する。

I. 調査対象

東北大学医療技術短期大学部看護学科の平成5年度入学生78名のうち1年次，卒業時にアンケート調査に了解し，1年次，卒業時に対応できた学生72名を対象とした。

II. 研究方法

調査には質問紙を用い，78名全員に一斉調査を行い，その場で回収した。調査項目は，水野ほか(1988)[6)]および若林ほか(1989)[7)]にもとづき「病院」，「患者」，「看護婦」のイメージ評定に用いられた形容詞の中からそれぞれ10項目を選択した。これに加えて我々が独自に選択した，「看護」のイメージ評定に適すると思われる形容詞10項目を併せて使用した。回答は「まったく当てはまらない」，「ほとんど当てはまらない」，「ややあてはまる」，「かなり当てはまる」，「非常に当てはまる」の5段階評価とし，それぞれに1点から5点を与えて数量化した。

調査は平成5年10月7日（1年次）と平成8年2月23日（卒業時）に実施した。

III. 調査対象の学習背景

1. 1年次

1学期の講義が終了し，2学期の講義が開始されたばかりである。1学期には一般教育科目，外国語科目，保健体育科目に加え，専門基礎科目（医学概論，解剖学，生理学，生化学，病理学Ⅰ，微生物学），専門科目（看護学概論，基礎看護技術，基礎看護技術実習）を履修している。

基礎看護Ⅰの実習は平成5年7月上旬の5日間であった。実習目的は，基礎看護学で学習した看護の知識や技術を用いて患者を看護し，さらに療養生活の実際場面を通して患者・看護・病院などを理解することである。

実習内容は，東北大学医学部附属病院の見学，外来での実習と病棟での受持患者の看護である。病院見学では，検査部，放射線部，薬剤部，材料部，人工透析室，給食部，手術部，ICU，周産母子センターなどの設備を見学し担当者より説明を受けた。外来での実習は，待合室で診察を待っている患者の様子，受付や待合室，診察・治療室などの医療チームメンバーの働いている様子を患者の立場に立って観察した。病棟実習は，病状が安定していてコミュニケーションがとりやすい患者を選択して，1人の患者を2名の学生で受け持ち看護を行った。

2. 3年次

一般教育科目，外国語科目，保健体育科目，専門教育科目（専門基礎科目，専門科目）の3年間の104単位以上のすべての履修を終え，国家試験を目前に控えた時期である。

3年次における臨床実習は，平成7年4月中旬から12月初めまでの24週間行われた。

臨床実習の目的は，1）対象の健康上の問題を個別的にとらえ，授業で学んだ理論・技術を活用して適切な看護を展開し問題解決能力を養う，2）対象を尊重し医療従事者としての態度を養う，3）医療チームメンバーを理解し，その一員としての看護婦の役割と責任を学習する，である。

実習は，東北大学医学部附属病院において学生5～10名のグループに分かれ，成人看護，老人看護，小児看護，母性看護のそれぞれの時期で看護ケアを必要としている患者を対象に，実習病棟で1名の患者を1～2名の学生で受け持ち，看護過程を展開するという内容である。

なお3年次には地域看護（保健所）実習が1週間あり，その目的は，総合保健医療の中における看護を理解するため，看護の対象を広く認識し，保健所の機能の理解を深め，地域看護の実際を学ぶことである。

IV. 結　　果

質問紙の回答は，統計解析ソフトSPSSを用いて分析が行われた。卒業時と1年次の結果については，評定値の平均値をその代表値とし，対応あ

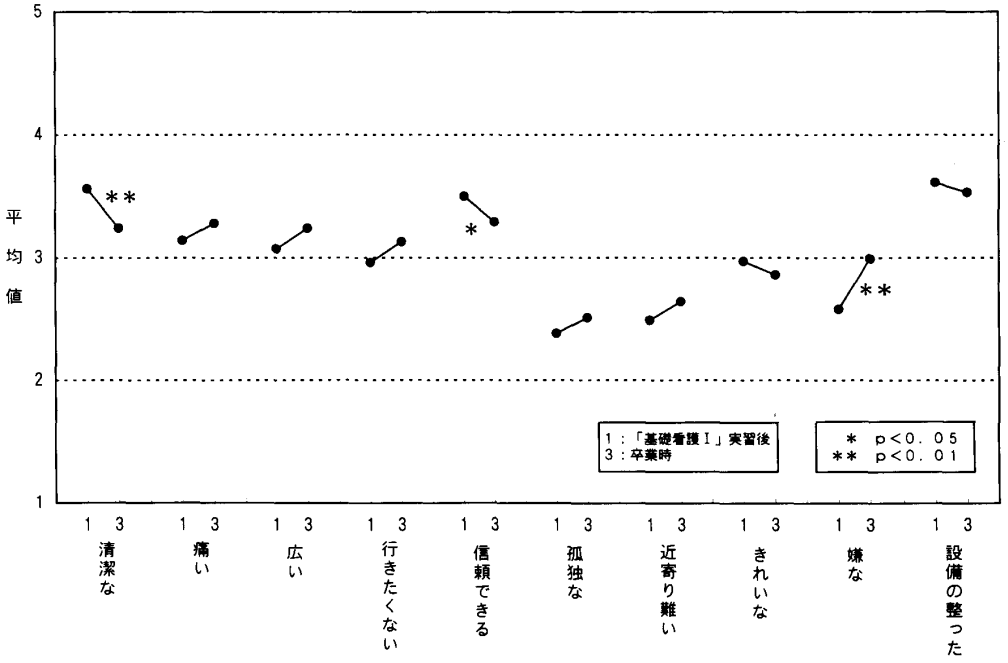

図1. 「病院」のイメージの変化

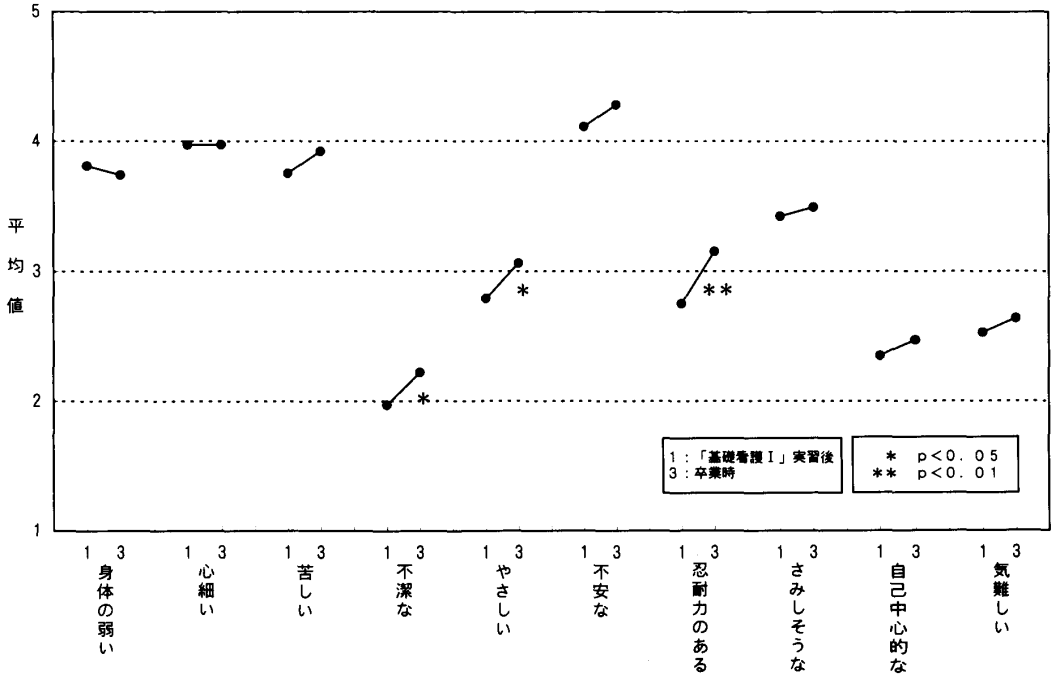

図2. 「患者」のイメージの変化

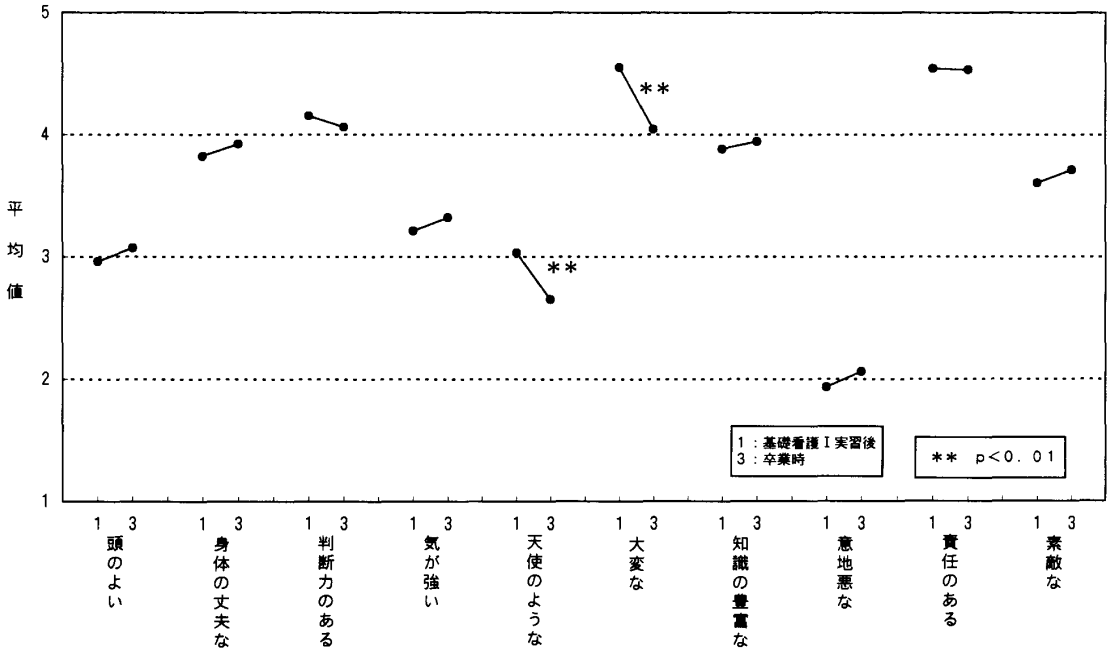

図 3. 「看護婦」のイメージの変化

る平均値の差の検定を行い，その結果を以下に示した（図 1～4）。

1. 病院のイメージ

「清潔な」の卒業時の平均値は 3.24, 1 年次の平均値は 3.56 であった（以下「清潔な」3.24（1 年次 3.56）と示すこととする）。「清潔な」を含め，「信頼できる」3.29（1 年次 3.50），「設備の整った」3.53（1 年次 3.61）の 3 項目は，病院のイメージの中で高い平均値を示していたが，卒業時になると平均値が低下した（以下，平均値 3.0 以上を高い平均値，3.0 未満を低い平均値と示すこととする）。

「孤独な」2.51（1 年次 2.38），「近寄り難い」2.64（1 年次 2.49）の 2 項目は，卒業時・1 年次ともに低い平均値を示していたが，卒業時になると平均値が上昇した。

卒業時・1 年次の平均値の差の検定では，「清潔な」（$p<0.01$），「嫌な」2.99（1 年次 2.58）（$p<0.01$），「信頼できる」（$p<0.05$）に有意差がみられた。

2. 患者のイメージ

「身体の弱い」3.74（1 年次 3.81），「心細い」3.97（1 年次 3.97），「苦しい」3.92（1 年次 3.75），「不安な」4.28（1 年次 4.11）の 4 項目は，患者のイメージの中で卒業時・1 年次ともに高い平均値を示していた。

「不潔な」2.22（1 年次 1.97），「自己中心的な」2.47（1 年次 2.35），「気難しい」2.64（1 年次 2.53）の 3 項目は，卒業時・1 年次ともに低い平均値を示していた。有意差のあった項目は，「不潔な」（$p<0.05$），「やさしい」3.06（1 年次 2.79）（$p<0.05$），「忍耐力のある」3.15（1 年次 2.75）（$p<0.01$）であった。

3. 看護婦のイメージ

「天使のような」2.65（1 年次 3.03）（$p<0.01$），「大変な」4.04（1 年次 4.55）（$p<0.01$）の 2 項目は有意に平均値が低下していた。

「身体の丈夫な」3.92（1 年次 3.82），「判断力のある」4.06（1 年次 4.15），「知識の豊富な」3.94（1 年次 3.88），「責任のある」4.53（1 年次 4.54）の 4 項目は，卒業時・1 年次ともに高い平均値を示していた。

「意地悪な」2.06（1 年次 1.93）は，卒業時・1 年次ともに低い平均値を示していた。

4. 看護のイメージ

「安楽にする」4.39（1 年次 4.03）（$p<0.01$），「説明し同意を得る」4.07（1 年次 3.68）（$p<0.01$），「患

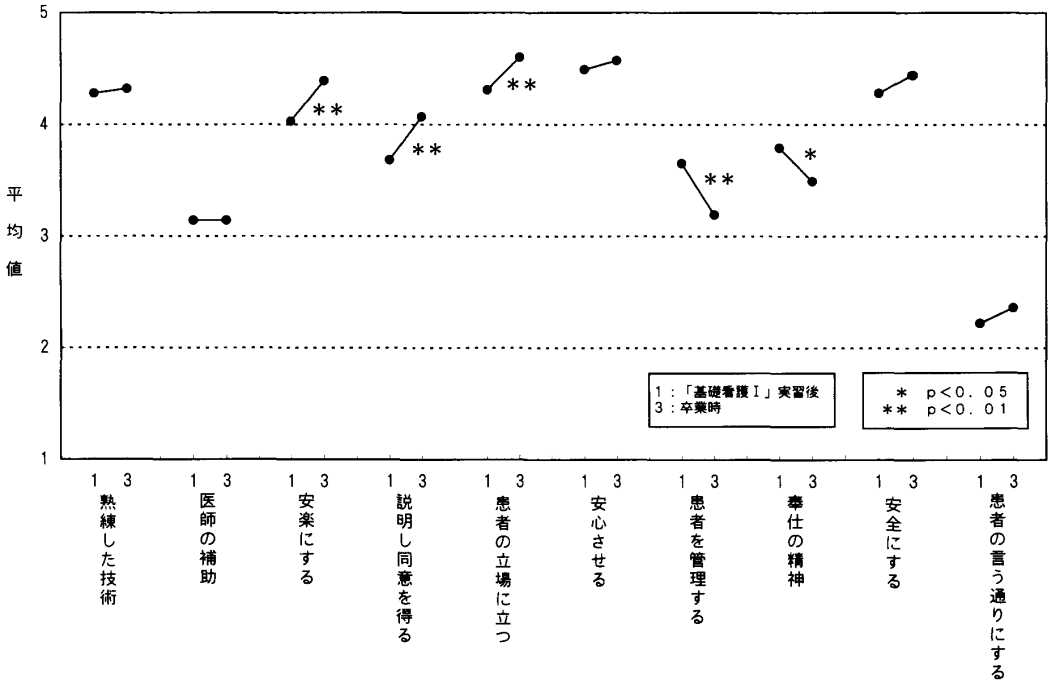

図4. 「看護」のイメージの変化

者の立場に立つ」4.60（1年次4.31）（p<0.01）の3項目は卒業時・1年次ともに高い平均値を示し，さらに有意に平均値が上昇した。

「患者を管理する」3.19（1年次3.65）（p<0.01），「奉仕の精神」3.49（1年次3.79）（p<0.05）の2項目は，卒業時•1年次ともに高い平均値を示していたが，卒業時には平均値が低下した。

その他の項目では，有意差はみられなかったものの，「熟練した技術」4.32（1年次4.28），「安心させる」4.57（1年次4.49），「安全にする」4.44（1年次4.28）の3項目は高い平均値を示し，「患者の言うとおりにする」2.36（1年次2.22）は低い平均値を示していた。

V. 考　　察

1. 「病院」のイメージ

「病院」のイメージでは，「清潔な」，「信頼できる」の2項目の平均値が有意に低下し，「嫌な」の平均値は有意に上昇した。この3項目の変化は入学から基礎看護Ⅰ実習後までの調査[2]と同様な結果を示した。病院のイメージの各項目の平均値は3.0前後であり，変化が少ないことも同様であった。

将来自分の活動の場となる病院についてはこの時点ではそれほど切実なイメージは持っていないように考えられ，学生の意識として病院を知ろうということが，第一の目的ではなかった。さらに今回，卒業を目前とした学生の病院に関するイメージは，1年次のイメージとの変化が少なかった。それは，病院が患者の療養の場，生活の場であるということについての関心の低さを示し，卒業時においても学生の関心は，看護の対象となる患者や看護ケアを実際に行っている看護婦であると考えられる。短い周期で実習を続けていく学生にとっては，療養の場，生活の場として病院を見る余裕がなかったことも考えられる。

2. 「患者」のイメージ

「患者」のイメージでは，「不潔な」，「やさしい」，「忍耐力のある」の3項目の平均値が有意に上昇した。

「不潔な」の卒業時の平均値は2.22と低値を示し，平均値は上昇したものの，患者を「不潔な」と捉えているわけではない。

一般的に清潔とは，さっぱりしていてきれいな

こと，不潔とは，汚物などにより，汚れていることと，感覚的なものとして捉えられている。1年次の学生は清潔・不潔に関して，感覚的な概念として理解していると思われる。しかし，微生物学，基礎看護学などの学習が進むにつれて，清潔・不潔が，感覚的なものだけではなく，細菌学的な知識を持って，科学的な面で，身体健康に大きく影響していくことを認識していくと考えられる。さらに，卒業時には3年次の臨床実習を通して，セルフケアできない患者の身体が汚れやすいことを知り，患者を清潔が必要な対象として捉えられたため，イメージが変化したと考えられる。

「やさしい」，「忍耐力のある」の2項目の平均値が上昇した背景には，臨床実習時の学生の受持患者の選択にも影響があると考えられる。それぞれの実習場で，実習開始時に，受持患者の選定について，学生が介入しやすい患者を依頼している。例えば，患者が必要としているケアの内容がわかりやすい人，学生が受け持つことにより，良い影響を受けると考えられる人などである。したがって，学生の受け持つ対象となる患者は，ケアを必要としている患者であることに加え，学生を快く受け入れてくれる患者であるためと考えられる。

3.「看護婦」のイメージ

「天使のような」の平均値は有意に低下した。天使とは，心の清らかな，やさしい人のたとえであり，「天使のような」の言葉には憧憬と理想が入り交じっていると考えられる。水野ら[8]は，憧れのイメージを強く抱いて看護学系へ進学したものは，入学後「天使のような看護婦」のイメージが卒業までに徐々に弱まっていき，さらに卒業後には大きく弱められると報告している。1年次の看護婦に対する憧れに基づくイメージは，学年が進むにつれて看護婦に対して的確な見方をするようになり，特に3年次には臨床実習を通して実際に看護婦と接する機会が多くなることで現実的な看護婦のイメージが形成されていくのではないかと考える。3年次の臨床実習では受持患者との関係は必ずしも円滑にいくとは限らない。時には患者から否定的な対応をされる場面もある。そのような患者の反応に対して，「天使のような」気持ちだけではいられないと感じたため，イメージが変化したのではないかと考える。

「大変な」の平均値は有意に低下した。天野は[9]，新人類といえども「看護婦は大変な職業である」と思わないものは極めて少ない，といっている。看護婦の仕事面だけではなく，看護婦自身が持つ充実感や幸福感など精神的な面についても目が向けられ「大変な」面ばかりではないというイメージに変化したと考える。

4.「看護」のイメージ

「看護」のイメージは，5項目で有意差があり，4種のイメージの中で最も変化が多かった。

「安楽にする」は平均値が有意に上がった。「安楽」という言葉は日常的に使われていないため，1年次では「安楽にする」の意味は漠然としていたと思われる。それが学内での基礎看護技術で患者を安楽にする具体的な援助技術を学び，3年次の臨床実習で実施してきたことにより「安楽にする」の意味が具体的に理解できたのではないかと考えられる。つまり，患者を「安楽にする」ことは看護独自の力で患者の問題を解決する援助技術であるということを実習を通して学んだためと考える。

「説明し同意を得る」の平均値は1年次から高く，さらに卒業時で有意に上昇した。

科学技術の発達により，高度な生命科学と人間性の調和の問題で，生命倫理の概念が波及してきた。また，患者の最善の利益は生存期間のみでなく，生命・生活の質（qualitiy of life＝QOL）も重要視され，がん告知や死についての積極的討議もされるようになってきた[10]。その中で，インフォームド・コンセントは患者の権利を守る重要な概念としても注目され，マスメディアなどを通じて一般社会でも理解が深まりつつある。当然，看護の立場としても「インフォームド・コンセントにおける看護の役割」や「看護行為の中のインフォームド・コンセント」ということに関心が高まってきている[11][12]。1年次の学生は，一般社会の常識として漠然とインフォームド・コンセントを理解しているものが多いと思われる。3年間の学習を積み重ねていくことで，医療及び看護の中で

のインフォームド・コンセントの重要な役割を認識したといえる。

「患者の立場に立つ」の平均値は1年次から高かった,。看護職を目指して入学した学生は，看護職が人間関係が基本となることを理解し，相手の立場に立つことが良い人間関係を保つために大切であるということをすでに認識しているためと考えられた。さらに，卒業時で有意に上昇したのは，3年次の臨床実習の中で，看護過程の展開を実際に繰り返し，患者の視点に立つことの大切さを，より確かなものと受けとめるようになったと考えられる。

「患者を管理する」は平均値が有意に低下した。「患者を管理する」に似た言葉に，看護管理がある。看護管理とは，患者に看護サービスを提供するという目的に添って医療活動全体が効果的，経済的に機能するよう計画・実践し，かつその結果を評価するものであり，患者の管理を意味する言葉ではない。1年次では看護管理について学習していないため，患者を管理するということを看護管理と混同していたと考えられる。卒業時には，患者をとりまく環境について認識し，物品や人員などを管理することが看護管理であり，決して患者を管理することではないと理解したために平均値が有意に低下したと考えられる。

「奉仕の精神」は，卒業時に平均値が有意に低下した。奉仕とは，利害を離れて社会のために尽くすことである。一般にボランティアは「役に立ちたい」という奉仕の精神が作用していると思われる。我々の高校生に対する調査[5]で，看護職希望者は非希望者よりもボランティアの経験比率が有意に高く，看護職希望者は奉仕の精神をもっている確率が高いと考えられる。しかし，学生は臨床実習を通して，根拠をもって看護することの重要性を体得する。「奉仕の精神」だけでは看護にならないと知ったことで，平均値が低下したと考えられる。

おわりに

今回，平成5年度入学生の卒業時における「病院・患者・看護婦・看護」のイメージの変化をアンケート調査し，1年次のイメージと比較し，以下のことが明らかになった。

1. 病院のイメージ

他のイメージに比べ変化が少なかった。それは，学生の関心が，患者の療養の場・生活の場としての病院よりも，看護の対象となる患者や看護ケアを実際に行っている看護婦に向いているからである。

2. 「患者」のイメージ

卒業時には「やさしい，忍耐力のある」患者としてイメージされ，さらに，臨床実習を通して，不潔というよりも，清潔が必要な対象としてイメージされた。

3. 「看護婦」のイメージ

「看護婦」のイメージは，実際に看護を体験したり看護婦の精神的充実感に接して，憧れや理想ばかりでない現実的なものとなり，また「大変な」ばかりでないものと認識された。

4. 「看護」のイメージ

「看護」のイメージは，3年間で最も変化するイメージであることがわかった。それは3年間の学習の積み重ねと臨床実習により，「看護」のイメージが現実化し，より鮮明になったからである。

文　献

1) 板垣恵子，菊池美恵子，庄子由美ほか：1年次「基礎看護I」実習後と2年次終了時のイメージの変化，東北大医短部紀要，**2**, 43-50, 1993
2) 小林淳子，小山田信子，塩飽　仁ほか：入学から「基礎看護I」実習後までの病院，患者，看護婦，看護のイメージの変化，東北大医短部紀要，**2**, 31-42, 1993
3) 庄子由美，小山田信子，渡邊裕美ほか：平成3年度，平成7年度看護学科入学生を対象とした看護に対するイメージの比較，東北大医短部紀要，**5**, 41-50, 1996
4) 小山田信子，塩飽　仁，庄子由美ほか：高校生を対象とした看護のイメージ調査，東北大医短部紀要，**3**, 131-138, 1994
5) 塩飽　仁，小山田信子，庄子由美ほか：高校生が看護職を志向する背景要因，東北大医短部紀要，**4**, 185-192, 1995

6) 水野　智，大西幸子，服部美保子ほか：看護学生の職業観測定のための予備的研究―「看護婦」,「医師」,「患者」,「病院」の各語から連想される形容詞の収集―，経営行動科学，**3**(1), 41-50 1988,
7) 若林　満，佐野幸子，水野　智：看護学生の職業環境の認知，―看護婦，医師，患者，病院に対するイメージの分析を通じて―，看護行動研究会，名古屋大学教育学部産業心理学教室，**36**, 121-137, 1989
8) 水野　智，佐野幸子，若林　満：看護学生の職業イメージを乗り越えて，EXPERT NURSE, 8(8), 30-33, 1992
9) 天野隆雄：新人類は看護婦をどのように見ているか，看護婦の注意すべき点について考える，看護教育，**9**, 572-575, 1987
10) 井上智子，佐藤禮子，石黒義彦：インフォームド・コンセント概観と我が国における諸問題，千葉大学看護学部紀要，**13**, 1-7, 1991
11) 寺本松野，村上國男，小海正勝：IC―インフォームド・コンセント―自己決定権を支える看護，日本看護協会出版会，1994, p. 3-50
12) 前掲書 11) p. 53-55